

「参加型メディア」Zine を取り入れた フィールドワークの授業：他者に伝え学び合う

西川 麦子

はじめに

本論文では、Zine（ジン、個人やグループが作る自主制作冊子）の「参加型メディア（participatory media）」（Piepmeier 2009, p.17）という特性に注目し、フィールドワークの授業に Zine 制作を取り入れた事例を紹介し、第三者に伝える意識を培い学び合うアクティブ・ラーニングの方法を考察する。

甲南大学文学部社会学科では、「他者とのコミュニケーションをとる手段」として多様な情報媒体の重要性を認識し、また国内外での社会的実践の方法を教育にも取り入れ、「伝えて学ぶ」メディア実践を授業の中で行ってきた（西川 2018, p.95）。「デジタル・ストーリーテリングの手法を用いた映像制作と発表会」「国内外の地域メディアにおけるラジオ・動画番組制作と放送・配信」「地域を素材とした映像制作と上映会」などを行う授業については、松川・辻野・西川（2018）に詳述している。本稿で紹介する「フィールドワーク研究」における Zine 制作や「大会」も、Zine という媒体を用いたメディアワークであるが、他の科目のような機材や設備、システム環境を要せず、紙や文房具と一定の広さの教室やスペースがあれば実施できる。フィールドワークの授業に限らず応用が可能であるが、それぞれの目的に応じた授業作りの工夫が必要となる。

1 では、筆者の Zine カルチャーとの出会いと社会調査の授業に取り入れた経緯、アメリカの大学や図書館で Zine がどのように注目され教育や地域連携活動に利用されているかについてを述べる。2 では、甲南大学社会学科の専門科目「フィールドワーク研究」の授業構成と「ZINE 大会」の方法について述べ、3 では、学生たちの作品についてその特徴を紹介し、最後に、4 において、米国のイリノイ大学の取り組みも参照しながら、Zine を取り入れた授業が、どのような場を作り出し、何をもたらすのかを考察する。

1 参加型メディアとしての Zine

1-1 他者に伝える難しさ、面白さ

大学の授業としての社会調査法は、社会調査士の資格取得カリキュラムなどに沿い、アンケート法、インタビュー法、観察法、など情報収集の方法とデータ分析に重点が置かれている。しかし、どれほど調査法を学んでも、社会に関心を持ち自分の問いを立てることや、現場から学んだことを社会に伝えようとする思いは、教室の中からは生まれにくい。筆者は、甲南大学文学部社会学科の専門科目「フィールドワーク研究」（2 年次配当）を担当している。これは、社会調査士カリキュラム F 「質的な調査と分析方法に関する科目」¹⁾ に当たる。50 名から 100 名の受講生を対象とした中規模クラスの講義形式の授業において、どのようにフィールドワークを教えることができるだろうか。

授業作りの方法を模索するなかでヒントとなったのが、筆者が行ってきた「草の根の活動とメディア」についての英米国での調査研究である。そこで、様々な社会運動にルーツを持つ地域に根ざした小さなメディアをめぐる活動が、情報を発信するだけでなく、多様な立場の人々に開かれた場を作り社会と関わるきっかけを作ってきたことを、私自身が次の 2 つのメディア実践に主宰者として携わりながら参与観察してきた²⁾。1 つは、米国のコミュニティラジオ局 WRFU での日本語番組 Harukana Show の制作³⁾、もう 1 つは、英米国でのコミュニティ活動とメディアについての取材を英文でまとめた自主制作冊子、*Grassroots Media Zine (GMZ)* シリーズの発行⁴⁾ である。こうした活動を通して、フィールドワークにおいて、情報を得るだけでなく、「他者に伝えることの難しさや面白さを知ることが、自分がいる場所やより広い社会から学び現場に関わるきっかけにもなるのではないか」と考えるようになった⁵⁾。

1-2 対話を生み出す Zine

Zine とは個人やグループが作る小冊子をさし、自主的に制作し自分たちで頒布する印刷物である。日本語では、ジンやリトルプレス、ミニコミ、同人誌、フリーペーパーなどと呼ばれることもある⁶⁾。日常の暮らしのパーソナルな体験や、料理から健康や自転車の修理の方法、LGBTQ、人種差別、環境問題、移民問題、政治批判など、あらゆる内容が含まれる。紙の質もサイズも形も決まりがない。手書き、パソコンで編集、印刷、雑誌などの文字、挿絵の切り貼り、シール、ビーズ、マスキングテープなど、いろいろなものを使ってデコレーションすることもできる。世界に1つしかない Zine を誰かへ贈ることもあれば、数冊、数10冊、数100冊、それ以上のコピーを作る場合もある。どこかに無料で置くのか、インターネットで販売するのか、その頒布方法も様々である。

英米国において筆者がどのように Zine カルチャーと出会い調査を始めたのかについては、西川 (2017) に詳述している。2010年から2011年にかけて1年間、アメリカに滞在している時に、イリノイ州の Urbana-Champaign Independent Media Center (UCIMC, NPO) にある Zine Library を知り、2011年に UCIMC が主催した Mid-West Zine Fest に参加した⁷⁾。主催者、作り手、売り手、読み手といった立場にこだわらず、Zine を手に取り会話が弾む様子が印象に残った。デジタルな情報化の時代に、こうした手作りの Zine が、アメリカでもイギリスでも日本でも注目され、各地で Zine をめぐるイベントが開催されている⁸⁾のはなぜだろう。こうした疑問と関心を持ち、筆者自身も GMZ を作りながら⁹⁾ 英米国の Zine を扱うショップや図書館の活動を取材するようになった。ラジオ番組にも関係者を招き、日本や英米国の Zine カルチャーについて話題にし、番組サイトにおいても取材内容を随時にレポート¹⁰⁾してきた。

作り手にとっても読み手にとっても「とっつきやすく」、作品を通して「対話を生み出す」Zine の特性¹¹⁾を、大学の授業に取り入れることができないか。2012年度の「フィールドワーク研究」から、受講生各自の調査をもとにした Zine 制作を最終課題として出すようになった。2016年度からは、受講生の Zine を教室に並べて読み合う講評会を、私が英米国で見てきた Zine Fest をイメージして、「ZINE 大会」と呼んでいる。

1-3 誰でもが表現し、つながる方法

ピープマイヤー (2011) は、Zine の特徴を次のように説明している。「ジンは参加型メディアであり、企業型の文化産業というより、むしろ消費者たちによって作られるメディアのひとつの例であり、1990年代なかばにはインターネットの興隆によって終焉が予測されていたにもかかわらず、近年の資本主義文化において継続中の潮流の一部として残っている」(pp.17-18)。また、Zine 作者や読者の間でやりとりされる贈り物や手紙にも注目し、Zine を「ギフト・カルチャー(贈与文化)」と捉え、手に取ることができる物として Zine から伝わる身体性が、Zine の読者と作者の間の特定のつながりを育むと指摘し、身体化されたコミュニティ、物質性への留意、楽しみとアイディアの重要性を強調している (pp.44-45)。

Zine は、他者に「伝えること」を前提とした表現・媒体であり、身近にある紙と文房具とプリンターやコピー機を利用して作ることができ、読み手と作り手の間の距離感がなく、対話を生み出す。Duncombe (1997 [2008]) も Zine の作者と読者との間の親密な関係性に注目し、Zine を手にとった人たちが、見まねで、自分でも Zine を作り出す現象を「エミュレーション」(emulation) と呼んでいる。Zine は、自分を表現し社会に何かを伝える媒体として多くの個人を触発し小さなつながりを作ってきた。

こうした特徴を活かして、地域の人々が、表現しつながる方法として、アメリカの一部の公共図書館や NPO のメディアセンターなどで、Zine Workshop が行われ、地方の Zine を集めた Zine Collection が開設されている¹²⁾。公共図書館は、デジタル化の時代において「書籍」を扱うことの意味やこれからの図書館が



写真1 「Zine Collection」セントルイス中央公共図書館、2018年10月22日

どのような形で時代に合わせて生き残っていくのかを試行錯誤し、地域とのつながりを様々に工夫している。地方の Zine を集め、その図書館にしかないコレクションを作り（写真 1、撮影は全て筆者による）、Zine Workshop を開催し、Zine Fest や Little Press Fest に場所を提供しているのも、その一つの試みである¹³⁾。

1-4 大学の授業で Zine-Making

アメリカの大学の授業でも、Zine-Making は取り入れられている¹⁴⁾。Creasap (2014) は、“Zine Making as Feminist Pedagogy” において、Hoffmann and Stake (1998) を参照し、Zine-making は、フェミニスト・ペダゴジー¹⁵⁾の3つの原理、「参加型学習、個人的な経験の受容、そして批判的な思考スキル (participatory learning, validation of personal experience, and the development of critical thinking skills) (p.156) を育むと述べている。ここで、フェミニスト教育学の議論に立ち入ることはしないが、「自己」をどのように発見し、かつ批判的に再考するかを、Zine を作る作業を通して学び合うというプロセスは、これから述べていくフィールドワークの授業における Zine 作りや「大会」と共通している。フィールドワークとは、現場から情報を収集する方法であるだけでなく、他者との関わりの中で自分は何者であるかを繰り返し問い、現場からの学びを第三者に伝えることを通して、自分や社会の中にある価値観を再検討するプロセスでもある。

Zine-Making を取り入れる目的は、授業の内容によっても異なる。筆者は、2018年9月よりイリノイ大学に客員研究員として在籍し、2018年秋学期に Zine Workshop を行なっている2つの授業に参加した。

1つは、情報科学部の Kathryn La Barre 氏¹⁶⁾（以下敬称略）が担当する図書館学についての大学院の授業である。Zine とは何かという問題は、従来の出版物としての書籍の扱いや分類法など、情報を扱う様々なリテラシーを再考することにもなる。11月28日の授業¹⁷⁾では、2時間の前半において筆者がゲストスピーカーとして、Zine 制作と「大会」を取り入れた甲南大学のフィールドワークの授業について話し、後半の1時間は「Literacy」というテーマで受講生たちは、担当教員が用意した色鉛筆やマジック、文具や紙類、雑誌や新聞などを使い、自由に切り貼りして Zine を作成した。大学院生たちは、最初は少し戸惑っている様子であったが、そのうちに、周囲と話しながら Zine 作りを楽しみ、リテラシーというテーマを自分に引き寄せて真剣に考えている様子が印象に残った（写真2）。



写真2 「Zine Workshop」イリノイ大学情報科学部、2018年11月28日



写真3 「Zine Workshop 参加者の Zines」イリノイ大学情報科学部、2018年11月28日

授業の終わりには、参加者がそれぞれの思いを込めたユニークな作品が出来上がった（写真3）。

もう1つは、イリノイ大学の都市・地域計画学部において、Efadul Huq 氏が担当する都市問題に関する学部の授業¹⁸⁾である。都市問題の背景にある植民地主義、グローバリゼーション、移民、ジェンダーなどの問題を多角的に学びながら、学生たちは社会的不平等を是正するにはどのような取り組みが可能かを考える。20名ほどの受講生が、それぞれテーマを決め調査を行い、これを学期の終わりに Zine にまとめる。Huq は、Zine が様々な意味でのマイノリティの声を伝える媒体として社会運動の中で活用されてきたことに注目した。オルタナティブメディアとしての Zine を授業に取り入れることによって、学生たちが、都市問題をどのような立場から捉え、誰に伝えたいのかを意識していくことができるのではないかと考えている。

この授業では、10月14日に情報科学部の La Barre と筆者を招き、Zine Workshop が行なわれた¹⁹⁾（写真4）。校舎のホールを借り、いくつかのテーブルに、La Barre が UCIMC の Zine Library から持ってきた Zine を並べた。甲南大学の学生たちが制作した Zine も1つのブースに展示した。受講生は、都市問題について



写真4 「Zine Workshop」イリノイ大学都市・地域計画学部, 2018年10月14日

各自が選んだテーマの調査研究の中間レポートを提出した後、この日のワークショップで Zine について学ぶ。そして、授業の最終回の12月11日には、それぞれの調査研究の成果をまとめた Zine 作品を教室に持参し、Zine Fest に参加することになっている（詳細は4-2）。

2 「フィールドワーク研究」の授業作り—「ZINE 大会」までのプロセス

2-1 Zine 作りを授業に取り入れる狙い

それでは、甲南大学の「フィールドワーク研究」において Zine 制作、「大会」を取り入れる狙いとは何か。結論を先取りして述べると、受講生にとって大きく3つの体験が得られると考えている。

第1に、現場からの学びを「他者へ伝える」体験である。この授業では、受講生が調査を企画しインタビューを行い、その内容を Zine にまとめる。フィールドでの経験や取材相手から受け取った言葉を、Zine を読む人にどのように伝えることができるか。読者を想定することで、現場から学んだことを第三者に伝える意識を育み、フィールドで出会った人々との関係を再考する。

第2に、「アイデアを形にする」体験である。Zine には基準となる形式がない。どのような大きさ、形、材料を使ってもよい。作者が、何を誰にどのように伝えたいのか、焦点を絞り、かつ、費用、時間、素材、技能など考え合わせないといけない。この作業を通して、作品を作る目的とアイデアを形にすることを学ぶ。

第3に、「批評をとおして学び合う」体験である。どんな調査を行い、Zine を作るかを考え始めると、

学生たちは、「フィールドワーク研究」で提出された過去の作品に関心を持つ。そして、自分の Zine が出来上がると、それがどのように読まれるかだけでなく、他の作品にも関心を持つようになる。共感、批評することを通して、自分の調査と作品について改めて見直す機会となる。

また、授業の最終イベントを、展示会や講評会、あるいはフェスではなく「大会」と呼ぶようになったのは、盆踊り大会、カラオケ大会のように、「参加型のローカルなイベント」を想像し、これに ZINE という聞き慣れない単語を組み合わせることで、「何だろう?」と学生が少しでも関心を持ってくれるのではないかと考えたからだ²⁰⁾。

こうした「狙い」はあっても、授業で Zine 作りを課題として提示するだけでは、受講生は、どこから手をつけてよいのか戸惑い、調査も作品制作も進まない。「ZINE 大会」に至るまでの段階的なプロセスを作る必要がある。

2-2 授業構成とプロセス作り

甲南大学の社会学科では、社会調査関連のカリキュラムが充実しており、学生たちは4年間をかけて段階的に調査法を学ぶことができる。「フィールドワーク研究」は2年次配当であり、質的調査の基本を学ぶ。週1回90分、15回、教室で講義を行う。授業や、「ZINE 大会」の準備などに時間を要するので、昼休みを使えるように3時限（13:00-14:30）に設定している。社会学科の学生とは限らず、フィールドワークに関心を持つ他学科の学生も履修することができる。

2018年度のフィールドワーク研究には、58名が履修登録した。授業開始が4月5日、「ZINE 大会」は7月12日、授業の最終回が7月19日である。4月（第1回～4回）は、フィールドワークのプロセスや調査設計、記録について学びながら、受講生は各自の調査テーマを模索する。5月（第5回～8回）は、観察法やインタビュー法など情報収集の技法を学び、調査企画書を作成、提出する。6月（第9回～12回）は、調査の心構え、ラポール、資料整理、伝える方法などについて考え、授業時間外に各自のフィールドワークを実施し、記録を作成する。第13回7月5日には、調査記録と作品タイトルを提出し、第14回の「大会」当日までに作品を仕上げる。

6月の実査に入るまでに、学生たちは、4つの中間課題に順次、取り組む。①指定したテキスト²¹⁾に紹介されている国内外の異なるタイプのフィールドワーク

の事例を読んだ感想, ②受講生各自の調査テーマの趣旨説明, ③インタビューフロー案作成(取材の内容, 質問項目, 時間配分, 流れなどをA4用紙1枚にまとめる), ④取材予定を含む具体的な調査計画書を作成する。また, 毎回の授業の最後には, その日の課題や授業への感想や気づきを記したリアクションペーパーを提出する。学生たちからの提出物に目を通して, 気づいたことを翌週の授業の中で話し, 受講生との情報共有と対話を心がけている。

5月中旬からは, 就職活動を終えた4年生の学生が1名, SA (Student Assistant) として授業をサポートしてくれた。彼女も2年前にこの科目を受講している。授業では, SA は, 自分の卒業研究の取り組みや, 学生たちの毎回のリアクションペーパーを読んで気づいたことを話す。同じ科目を履修した先輩の経験に基づいたアドバイスには説得力があり, SA の意見を聞くことを楽しみにしている学生もいる。受講生にとって, 同年代の SA や少し年上の大学院生の TA (Teaching Assistant) が参加してくれることで, 少しでもフィールドワークが身近に感じられる。「ZINE 大会」の準備などを含め, この授業では, SA や TA の協力が欠かせない。

授業では調査方法については筆者が詳しく講義をするが, Zine については, 「取材内容に応じた, あなたが伝えたいことをデザインした Zine 作品を自由に作ってください。ただし, その作品を, 取材対象者に見てもらえるものに仕上げてください」と伝える。学生たちは, Zine という聞きなれない単語や「自由」という言葉に不安を抱く。そこで調査と作品制作の手がかりとなるのは, 「フィールドワーク研究」の過年度の受講生たちの Zine である。授業で提出された Zine についてのパワーポイントを見せ, 教室にこれまでの作品を並べ, 手にとってみる機会を複数回設ける。「こんな多様なテーマがあるのか」「こんな作品を作ってもいいんだ」という刺激を受けつつも, それとは異なる発想の調査, 作品制作について考え始める。

しかし, 調査企画書を作成した後も, 多くの学生は, 実査になかなか踏み出せない。2018年度の授業では, 第9回に, 出席者全員にマイクを回し, 各自の調査テーマと取材の進行状況を話し, 私がそれぞれのプレゼンテーションに短くコメントした。参加者は, 話すだけでなく, 他の学生の言葉とコメントに熱心に耳を傾け, この日のリアクションペーパーには, 出席者それぞれの気づきや, 他の学生の試みに対する意見も書きこまれていた。

「ZINE 大会」の1週間前, 第13回の授業には, 「調査報告シート」を提出する。これは, 報告書 (Zine) のタイトル, 調査課題, 取材対象者の説明, 取材の経緯 (調査実施の年月日, 場所を含む), 取材の内容, 調査の成果, 残された課題, 参考文献, 資料一覧などを含む。所定様式に沿って, このシートを作成することによって, フィールドワークに不可欠な「記録」を作成した上で, Zine を自由に創作する。

また, この調査報告シートの提出が, 「ZINE 大会」参加のエントリーにもなっている。この調査報告シートをもとに, 各作品の通し番号とタイトルとを入力した「プログラム」を作成する。「ZINE 大会」では, 作品の作者も読者も評者も, 「通し番号」を氏名の代わりに用いる。本人が希望すれば, Zine やコメント用紙に名前を記載してもよい。原則として通し番号を使うことで, Zine の作者の学年や学科, 学部などの属性を一旦外して, プログラムのタイトルを見て, 読みたい作品を手に取り, またコメントを自由に記しやすくしている。

2-3 「ZINE 大会」一伝え学びあう場

開場：授業開始15分前

「大会」当日は12時半から2会場となる教室での準備を始める。机の上に, A 「通し番号を記したA4用紙」, B 「プログラム」, C 「ZINE 大会ルール」, D 「総評用紙」を1セットずつ, 通し番号順に置く(図1)。参加者は, 自分の作品を携え, 授業開始15分前には会場に集まり, 自分の番号が記された用紙Aが置かれた机の席に座る。自作品をそこに置き, 「ZINE 大会ルール」(図2)を確認する。

閲覧タイム：1時間

まず, プログラムをじっくり見て, 50あまりのタイトルから興味ある作品を探す。テーマは, ファッション



図1 「ZINE 大会配布用紙」甲南大学文学部, 2018年7月12日

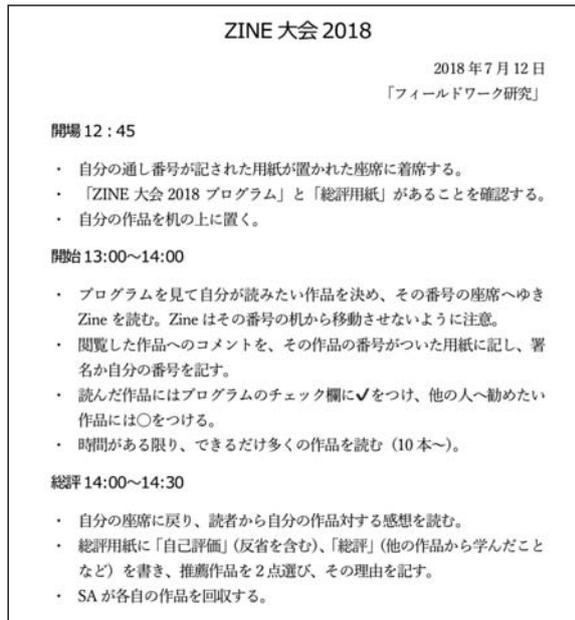


図2 「ZINE大会2018ルール」 甲南大学文学部、
2018年7月12日

ン、音楽、スポーツ、ゲーム、旅行など現代の若者文化や、結婚、子育て、アルバイトや部活、多様な自営業、ボランティアなど、多岐にわたる。

「大会」が始まると、読みたい作品の番号の席へ移動して作品を読む。それぞれの作品へのコメントを、番号が付された用紙Aに記す。読んだ作品にはBのプログラムのチェック欄に印をつけ、他の人にも勧めたい作品には○をつける。1時間で、できるだけ多くの作品を読む。1つの作品を何人かで感想を言い合いながら楽しんで読んでいる光景もよく見られる(写真5)。

1時間の閲覧時間が終了すると自分の通し番号の席に戻り、用紙Aに記された読者からの自作品に対する感想を読む。Dの総評用紙には、自己評価、「ZINE大会」全体の感想、推薦作品を2点に絞り、その理由を記す。



写真5 「ZINE大会2018」 甲南大学文学部、
2018年7月12日

「ZINE大会」への参加者の意気込みは高いが、一方で、自分の作品を読んでもくれる人がいるだろうか、どんなコメントがあるだろうか、不安になる学生も多い。総評時間に入り、自分の番号が記された用紙Aに、とにかく誰かが、しかも複数の人が自分の作品を読み、感想を書いてくれたことに安堵し、手書きで記された一人ひとりからの感想を読む。自分の作品を読者がどのように受け止めたのかを知る貴重な瞬間である。

総評用紙には、「ZINE大会」に参加した全体の感想と、自己評価を記し、他の人にぜひ読んでほしいお勧めの作品を2点だけ選ぶ。自己評価には、作品の中で工夫した点に読者が目を留めていることを知り嬉しかったり、全く予想外の評価にそのような見方もあるのかと新鮮に受け止めたり、時間をかけた調査ができず伝えたいことはあったのに不十分な作品になったことに対する悔しさを滲ませる感想もある。学生たちは、それぞれの作者の調査や作品制作に対する熱意や工夫とともに「手抜き」も鋭く見抜いているが、各作品への直接的な批判を記すことは避け、総評として気づいたことを記し、また自分の調査のプロセスや作品への反省材料にしている。

総評用紙に記載された各自2点の推薦作品番号と理由を全て入力したプリントを作成し、翌週の最後の授業に配布する。そして、全作品の表紙の写真と推薦マークがついたスライドを1つずつ見せ、参加者からの推薦数が多かった上位の作品と、その他にも科目担当者である筆者にとって記述の内容が印象に残った作品を教室で再提示する。学生による「審査」を可視化するのは、得点数を競うためではなく、作品の何がどのように評価されたのか、読者の多様な視点を知り、学び合うためである。「ZINE大会」において重要なのは、参加者一人ひとりが、その人にとって共感できる作品に出会うことである。それは、「伝えること」、「伝えること」の可能性を知る貴重な経験となる。

3 学生のZine作品—アイデアを形にする、関係性を問う

3-1 自分のアイデアを活かす

2018年の「フィールドワーク研究」は、履修登録58名のうち53名がZine作品を提出した。3分の1の作品は、大学の提出物で最もよく使うA4用紙に、図表、写真を入れてカラーで印刷し、またイラストだけ手書きし、ホッチキス(あるいはリボンなども使って)綴



写真6 「甲南大学 Zine 作品ブース」イリノイ大学、都市・地域計画学部、2018年10月14日

じている。他の作品は、手のひらサイズの手帳からB4サイズの画用紙まで一様ではなく、文字もイラストも手描き、あるいはプリントアウトした文字を切ってノリで貼っている場合もある。学生たちの作品は、複数部数をコピーして頒布することを目的にしているわけではない。このため市販のスケッチブック、絵本ノート、無地、あるいは罫線入りのノートなどを選び、そこに書き込み、貼り付けて制作している作品も多い。2018年度は、クラフト紙を使用している作品が多かった（写真6）。

Zine 作りに多くの学生が夢中になるのは（これを苦手とする学生もいるが）、自分のアイデアを形にする面白さである。扱うテーマのイメージを輪郭とした作品（例えば、たこ焼きを模した円形、スマートフォンの形・サイズ、銭湯の形など）、巻紙作品もあれば、紙芝居を作ったり、表紙に穴を開けスニーカーの紐を編んだものなど、多様な作品が提出される。普通のノートに見えても、ページを開くと細部に様々な工夫がされている。作者にとっては、その材料やデザインを選ぶ理由があり、何をどう伝えるかを思考/試行した足跡である。

2018年「ZINE 大会」では、取材内容をまとめるだけでなく、伝え方を工夫している作品が多く見られた。例えば、学生Aは、「大型書店と戦う地域密着型書店」というテーマで、独立系の書店取材した。この書店では、子供とその親たちを対象に絵本や参考書だけでなく、文房具コーナーを設けお菓子も取り扱っている。Aは書店主にインタビューし、店内での「読み聞かせ」のイベントにも参加した。Aは、イラストを描くのは苦手だった。しかし、この書店の取り組みについて伝えるなら、あえて「絵本っぽい」作品にしたかった。真っ白なハードカバーのノートを選び、そこにペンと

色鉛筆を使い、手書きの文章と登場人物をキャラクター化した絵を描き写真も貼った。硬いタイトルとは対象的に、ふっと手に取り読みたくなる Zine ができた。

「フィールドワーク研究」の授業では、自分のパソコンを教室に持ち込む学生は少ない。手書きでノートを取り、色とりどりのペンや多様な文具を入れたポーチを持ち歩いている。ノートに絵を描き、リアクションペーパーに文章だけでなく、イラストを添えて提出されることもある。また、市販のノートを色鉛筆、マスキングテープ、シールなどを駆使して自分なりにデザインした手帳、日記帳、写真帳、スクラップブックなどを作っている学生もいる。「フィールドワーク研究」の授業で提出された Zine には、素材としての紙やノート選び、ページの使い方、手書きの文字や絵、色使いなどの細部まで、学生たちの手作り、手描き文化のアイデアが活かされている。

3-2 ラポールとコミュニケーション

1つひとつの作品と、授業の中間課題や毎回のリアクションペーパー、作品とともに提出する調査記録を併せ読むと、作品に至るプロセスが浮かび上がってくる。学生たちが最も苦労するのは取材対象者との関係、距離の置き方である。学生Bは、調査対象者にどのようにアプローチするかを悩んでいた。大学の授業では、調査の趣旨を説明した上で承諾を得て取材をするようにと学んだが、「調査」を依頼したら、自分も相手も緊張して普段のように話せない。迷ったが、まずは話を聞いてから、これが大学の授業の課題であることを伝え、相手から匿名なら書いてくれても問題ないよと許可を得た。学生Cは、レコード店に何回も通い、店主と話せる関係を作り、それから取材を依頼した。学生Dは、月に1回地域の住民が集う「ふれあい喫茶」を取材するために、まずは事前に主催団体を訪問し調査について説明し許可を得てから、当日集まった人々に説明し報告書を作成することについても快諾を得た。

Zine に掲載されているインタビューのテーマは様々だが、取材対象者の仕事や活動において、人との関係をどのように作っていくのか、コミュニケーションが一つのキーワードになる作品も多い。

[理髪店主の人生を楽しむ話術]

学生Eは、中学生の頃から通う地元の理髪店取材した。Eの調査記録には取材の経緯が記されていた。「理容師の話術はすごい、どんなスキルがあるのか。前日に散髪予約を入れて、当日、お店でインタビュー

を依頼した。『照れ臭いから、いつものように散髪しながら』と提案された。髪の毛を切ってもらいながら聞き手になることに徹した。自分が予想していない話も飛び出した。彼の作品には最後にこんなやりとりが記されていた。

E「散髪中の会話って営業だからしている?」(楽しくしているわけじゃない?), 怒られるのを承知で聞いてみた。

理容師「いやまあ、俺じたいが人と話すん好きなところもあるけど、会話がなくなってしまうと集中力が切れてしまうんよな(笑い)。それに仕事終わってからごっつい疲れるねん。黙々とただ仕事しとったら1日がものすごく長く感じる。それやったら、お客さんがどう思っているか表情を把握しながら話すほうがええわ、楽しい時間は早く過ぎるって言う(笑)」。

1歳から92歳の客に対応する理容師が身につけた話術は、彼自身が仕事を楽しむコツでもあった。そんな本音の話を客人とできる理髪店の雰囲気、B4サイズの画用紙に大きな文字で描かれたEの作品によく表われていた。

[パティシエは地道な積み重ねとホスピタリティ]

学生Fは、「子供の頃、将来の夢はパティシエール」だと書いていた。大人になってそんな夢は遠くなったが、ケーキ屋でアルバイトをしている。そこで疑問に思う。「パティシエは、圧倒的に男性が多い。なぜだろう」。Fは、同じ店で働く調理師学校に通いパティシエを目指す学生と店主であるシェフに話を聞いた。Fは、知り合いへの取材は難しくないと思っていたが、調理師学校の学生からは録音や本人の写真は断られ、話を聞きながら必死でメモをとった。シェフには30分ほどのインタビューを予定していたが、話を聞いているうちに、次々と質問が浮かび、1回では聞ききれず、2回にわたり、2時間以上の話を聞き、ケーキを撮影する時間ももらった。

F「ケーキを作る上で一番大切にしていることは?」。シェフ「お客さんに喜んでもらいたいって思いながら作ることでしょかね。この職業はホスピタリティ精神がないと続けられない」。

F「今までで1番の最高傑作は?」。

シェフ「ないです。それがあるっていったらもうやめる時です。もういいやって満足したってことになりま

すし」。

Fは最後に尋ねる。

F「パティシエとは?」。

シェフ「退屈な仕事である。地味な作業の積み重ね。毎日、変わらないけれど、いかにこう同じことを積み重ねられるかっていうところにパティシエの仕事のメインがあると思います」。

Fの作品には、溢れんばかりの文字と美味しそうな美しいケーキの写真が多数掲載され、ページをめくるだけで、この取材に協力してくれた人たちへの感謝と、彼らの言葉を読者に届けたいという思いが伝わってくる。

3-3 伝える意志

調査に基づいて Zine を作るだけでなく、「ZINE 大会」で多くの人に読んでもらうことを意識した作品もある。

[読者全員が第1に推薦した給食作品—作者は複雑な心境]

2018年「ZINE 大会」において、読んだ人全員から推薦を得たのが、給食について扱ったGの作品である。子供の孤食や偏食などが問題になる中、学校給食はどのような役割を果たしているのか。兵庫県芦屋市内の小中学校の学校給食は、栄養教諭を置き、自校調理方式をとり、全国でも注目され、高い評価を得ている。

Gは芦屋市内の自分の出身小学校を訪ね、栄養教諭から話を聞いた。また、芦屋市と神戸市の小学校卒業生に、給食にまつわる思い出と現在の食事情についてオンラインで座談会を行った。栄養教諭への取材を通して彼女は、給食が食事を提供するだけでなく、栄養バランスはもちろん、旬の野菜の美味しさや、行事食、そして食事は楽しいということを、生徒に伝える多角的な食育指導の取り組みであることを知る。また、栄養教諭たちは、献立を作り調理するだけでなく、時には子供達と一緒に食事をとり、生徒たちからの直接の声を受け取り、献立に反映していく。Gの作品は、クラフト紙のリングノートに、白紙に印刷した文章や、ペンや色鉛筆を使った文字やイラストを切り貼りして、ぎっしりと詰まった内容を、ページごとにレイアウトを変えて楽しく読ませる。

イラストが抜群にうまいが、Gは、「本当は写真を掲載したかったが、撮影を断られた」と話す。また、

「たくさんの人に見てもらえることを意識して身近なテーマを選んだ。実際に多くの人に手に取ってもらえたことは嬉しいが、少し複雑な気持ちになった。これからは、重い、堅いと捉えられがちなテーマでも、見たいと思わせる伝え方をしていきたい」と感想を述べている。

[手話を知っていますか？—異なる文化の間をつなぐ]

Hは、家族にろう者がいるので暮らしの中で手話を使っている。他の学生は、手話やろう者について知っているのだろうかとか疑問に思い、手話を紹介するZineを作ろうと考えた。3人のろう者に手話を使ってインタビューを行った。調査記録には、自分は知っていると思っていた手話やろう者が抱える問題について、「自分もろう文化について理解が足りないことを痛感した」と記されていた。

Hの作品は、縦書きの文章に、カラーの挿絵や縁取りの模様を入れ、白い紙に印刷した。これを市販の横書きのノートに貼り、印刷した紙の上下をマスキングテープで縁取り、右から左に頁が進み、上から下へと文章を読む冊子となった。「手話を知っていますか？」と読者に問かけるタイトルにした。読者に語りかけるような分かりやすい文章である。手話やろう者について知ってほしいという作者の気持ちが伝わってくる。「はじめに」は、こんな内容の書き出しである。「ろう者とは、手話を母語としている人のことをさす。日本人の多くが日本語を母語にしているのと同じように、ろう者には、手話が母語である。日本の手話と日本語とは違う。言語が違うということは、その人たちの文化も違う」。

そして、ろう者と健聴者とのコミュニケーションの難しさについて、本文では、例えばこんなインタビューの内容を紹介している。

「手話以外にろう者と会話する方法としてメモに文字を書くと言う方法があるが、人によってはメモでの会話はろう者には難しい。なぜなら、(日本語の)言葉の感覚がない人が多いからだ。日本語と日本の手話は別の言語とわかっている健聴者はほとんどいないでしょう」。

ろう者への手話を用いたインタビューを通して、ろう者の文化を翻訳して読者に伝えようとする試みはまさに、多様な文化から学び伝える文化人類学者のフィールドワークである。「ZINE 大会」で、多くの参加者がHの作品を手にとり感想を残した。大会終了後、Hは自分の作品を一旦持ち帰りたいと申し出た。1週

間後、オリジナルのZineを少し修正したもう1冊の作品が筆者のもとへ届けられた。「取材を受けてくれた人たちにZineを見てもらったら、喜んでくれて、それからもっとたくさん話をしてくれた。Zineが人に伝える方法になることを知った。続きのZineを作れたらいいなと思う」と話してくれた。

Zine作りと「大会」は、フィールドワークの授業においては、伝える意志を育む1つの方法となり、伝わる実感は、次なる伝え方を考えるきっかけにもなっている。

4 参加型メディアを使ったイベント作り

4-1 学び合う場面を作る「手段」

「フィールドワーク研究」においては、Zine作りと「ZINE 大会」を通して学生たちは、「他者に伝える」「アイデアを形にする」「批評をとおして学び合う」ことを体験する。調査もZine制作も個人で行うが、「ZINE 大会」が設定されていることにより、「伝える」という行為がよりリアルに想像される。しかし、その講評会を、従来の調査レポートではなく、Zineを制作にすることによって、何が変わってくるのだろうか。甲南大学でフィールドワークに関する講義科目を長年担当してきた筆者の経験と2018年度の授業を振り返り、Zine作品とその他の提出物(毎回のリアクションペーパー、4つの中間課題、調査報告シート、Zine作品と「大会」における個別の作品へのコメント、総評用紙)を読み返してみると、大きくは3つの「傾向」が見られる。

第1に、フォーマットがないZine作りを通して、作者が何を伝えたいのか問題意識がより明らかになる。授業で学ぶ調査法では、調査課題にもとづいて調査方法や対象を選び調査を設計するが、誰もが最初から「問題意識」や「自分の問い」を明確に持っているわけではない。授業で出される課題に沿って、とりあえず調査を企画、実施、記録し、これを形にしようと模索する時に、自分が何を問題として伝えたいのか、改めて考えるようになる。Zineは、形式が自由であるがゆえに、作品として「手におえる範囲」の枠を自分で設定せざるをえず、またそこでは自分のアイデアを様々な活かすこともできる。何をどう表現するか「伝え方を模索」しながら、調査から学び伝えたい問題の焦点を自分で見極めていくことになる。

第2に、調査の内容を他者に伝えようとする時に、

取材対象者との関係を振り返るようになる。Zine とはそもそも、よりパーソナルな自己表現の手段であり、同時に、他者に伝える媒体である。自分と向き合う時のさまざまな感情²²⁾と他者に伝えるという行為とに折り合いをつけながらモノとして Zine が出来上がっていく。調査をもとにした Zine 作りにおいても、自分が収集した一次資料を扱うだけでなく、フィールドワークという個人的な体験やそこで出会った人々と自分との関係について振り返り考え始める。

第3に、他者の作品に関心をもつようになる。自分が Zine 作りに思いを込めるほどに、他の作品がどんな内容で作り方をしているのか、以前より関心をもつようになる。また、Zine は、物語としての構成や展開だけでなく、色やデザイン、手触りも含めてモノとして身体的に伝わる表現である。「ZINE 大会」では、各作品の横に置かれたコメント用紙には、Zine に触れた直後の感想、気づきを記し、総評用紙には改めて2点の推薦作品を選びその理由を記す。読者と評者としての二重の言語化と、その結果を「大会」(授業)参加者と共有することによって、様々な「作品の見方」を学ぶことになる。

本稿で紹介したフィールドワークの授業においては、調査手法を学ぶだけでなく、調査をもとに作品を制作し、読み手からフィードバックを得るというプロセスを凝縮して行う。この授業における Zine とは、自己と向き合い、他者に伝え、学び合う場面を作る「手段」である。「フィールドワーク研究」は、授業時間外での実査と作品制作に相当な時間と労力と集中力を要する。学生にとっては負担が大きい科目であるが、それでも授業として成り立つのは、Zine 作りが楽しく、そして何よりも、学生たちが制作する Zine に読み手を触発する力があるからである。過年度生による作品を含め多様な Zine に、「それ、すごく、わかる」と共感し、「こんなやり方があるのか」と驚き、好奇心をおおいに刺激される。そして「ZINE 大会」への参加に向けて真剣に準備し、会場での静かな緊張と盛り上がりの中で他者に伝わる手応えを知る。遊びながら学び共有する、そんな経験が社会への関心へもつながるのではないかと考えている。

4-2 社会への関与を促す Zine-Making

イリノイ大学の都市・地域計画学部の都市問題の授業では、2018年秋学期の最終日に教室で Zine Fest が開催された²³⁾。12月11日、学生たちはそれぞれが作った Zine を教室に持参し、20の Zine が並んだ。各作



写真7 「Zine Fest」イリノイ大学都市・地域計画学部、2018年12月11日

品の横にはフィードバック用紙が置かれ、読んだ人が自由に感想を書く。教室の前には、お菓子や飲み物が用意され音楽を流し、Zine を読んだら、食べながら自由に話そう、という授業の打ち上げパーティも兼ねていた(写真7)。1つの Zine を複数の学生が読みあい、「これすごいよね」と感想を言い合う様子は、甲南大学の「ZINE 大会」と似ている。

学生たちの作品は、住宅、銃、人種差別、ワールドカップなどをめぐる問題を、特定の都市や、ある団体、場所の取り組みに注目し、2ヶ月前の概論をまとめたレポートより、対象や視点が絞られていた。依拠するデータは、オンラインで得た情報や文献からの引用、取材など一様ではない。現状や問題を指摘するだけでなく、それを変えていこうと訴えかける作品が多いことが印象に残った。文章を中心とした小冊子もあれば、立体的な作品や、ページに挟んだ紙片を手紙のように開いて読んでもらう作品もある(写真8)。紙の裁断が不揃いであっても、ホッチキスの綴じ方が少々いびつであってもそのまま、表現したいイメージを自分で作り上げてゆく工程を残したままの「はみ出る」作



写真8 「Zine 作品」イリノイ大学都市・地域計画学部、2018年12月11日

品が多く、甲南大学の学生の作品が市販のノートを使うなどして一定の形に「納める」作品が多いのとは対照的であった。

授業が終わってから科目担当の Huq に尋ねた。一般のレポートを作成するのと今回のような Zine を作るのとは、何が違うのか。「レポートは調べたことをそのまままとめて退屈なものが多いけれど、Zine という形にしたことによって、学生がその問題に関与するようになった」と話した。この授業でも、Zine-Making と Zine Fest は、学生たちが社会に関わりながら学び始める一つのきっかけになっている。

おわりに

本論文では、筆者が担当する Zine を取り入れたフィールドワークの授業を事例として紹介し、第三者に伝える意識を培い学び合う授業作りの可能性を論じてきた。他方で、イリノイ大学における図書館学や都市研究の授業に参加して、専門分野や科目の目的に応じた形で、Zine Workshop や Zine Fest が取り入れられていることを知ることができた。イリノイ大学において Zine カルチャーに関心を持つ研究者は、それぞれが社会的な活動を通して Zine と出会い、そこでの経験を大学教育に応用している。

また、本稿では扱うことができなかったが、2019年1月24日にロンドンの「ブックアート・ブックショップ」(Bookartbookshop)で、2018年度「フィールドワーク研究」の Zine 作品をショーウィンドウに展示する初めての試みを行った(写真9, 10)。この書店は、ブックアートや少数部数の出版物、アート系の Zine を扱い、様々なイベントも開催され、アートと本と人と場所をつなぐある種のコミュニティスペースにもなっている²⁴⁾。この日は、道ゆく人がふと足を止めて Zine 作品の展示を見たり、また店内にいた客がわざわざ外



写真10 「SKU Fieldwork Project Zine 作品展示」
Bookartbookshop, ロンドン, 2019年1月24日

へ出て道からウィンドウの展示をじっくりと眺める姿も見られた。日本語の Zine 作品の海外での展示を通して、「他者に伝える」ことの可能性を知ることができた。

様々な社会運動にルーツをもつ地域に根ざした小さなメディアをめぐる活動は、Zine を含め、人と人をつなぐ場を作り、社会意識を育ててきた。他者に伝えて学び合う現代的な方法を、社会や状況、時代に応じて展開してきた草の根の活動から多角的に学ぶことができるのではないかと考えている。

謝辞

草の根の活動とメディアに関するフィールドワークとメディア実践、そして教育の現場において、多くの人々に出会い、伝えながら学ぶ面白さを知り、さまざまな刺激を受けてきました。2015年度からは、科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)「多文化社会における“コミュニティ”活動とメディア戦略に関する実践的研究」(研究代表者西川麦子, 2015年度～2018年度, 課題番号15H05173-00)を得て、Urbana-Champaign と London での調査研究と2つのメディア実践を継続するとともに、その成果を大学教育に活かす試みを行うことができました。2018年9月からは甲南大学より在外研究の機会を得てイリノイ大学に在籍し、研究や教育について教職員と情報を交換する貴重な機会を得ています。この論文の内容と関わる一部の方々と団体のお名前を記させていただきます。心より感謝を申し上げます。Kathryn La Barre, Thomas Garza, Efadul Huq, 石黒加那, Leila Kassir, 小牧龍太, Christine LaBarbera, 松川恭子, 西川祐子, Tanya Peixoto, Chris Rizo, 立石尚史, 辻野理花, Bookartbookshop, Chicago Publishers Resources Center,



写真9 「Bookartbookshop での SKU Fieldwork Project Zine 作品展示 (2019年1月24日) フライヤー」

Housmansbookshop, 甲南大学 (文学部, 教務部), Quimby's Bookstore, St. Louis Public Library, University of Arts of London (London College of Communication), University of Illinois at Urbana-Champaign (Center for East Asian & Pacific Studies, Department of East Asian Languages and Cultures, Department of Urban and Regional Planning, School of Information Sciences), Urbana-Champaign Independent Media Center (Zine Library, WRFU), Urbana Free Library.

注

- 1) 日本の大学において社会調査関連の授業は, 社会調査士資格制度に参加している場合は, 社会調査協会のカリキュラムにもとづき, 「調査企画から報告書作成までの社会調査の全過程」や量的, 質的調査の手法, 分析方法を専門的に学ぶことができる。「フィールドワーク研究」は, 社会調査士カリキュラムFに当たる。社会調査協会のホームページでは, 「さまざまな質的データの収集や分析方法について解説する科目。参与観察法, フィールドワーク, インタビュー等の質的調査の方法, および, ライフヒストリー分析, 会話分析, ドキュメント分析, 内容分析, グラウンデッドセオリー, ビジュアルデータ分析等の質的データの分析法 (質的データ分析ソフトの使用法を含む) など」と説明されている。一般社団法人社会調査協会 website 内, 「社会調査士カリキュラム詳細」を参照。
- 2) 西川 (2012, 2013a, 2013b, 2013c, 2014a, 2014c, 2016c, 2017) を参照。
- 3) Harukana Show は, イリノイ州, Urbana 市にあるコミュニティラジオ局 WRFU から, 毎週金曜日午後6時から7時に生放送・ストリーム配信されている。2011年4月から始まり, 2019年1月25日現在, 410回を重ねた。ラジオ局スタジオと日本をオンラインでつなぎ番組を制作している。詳細は Harukana Show website を参照。
- 4) *Grassroots Media Zine* は, No.1 (2013), No.2 (2014), No.3 (2016) まで発行, 継続中。詳細は, Grassroots Media Zine website を参照。
- 5) 英米国での調査研究とメディア実践とともに, その成果を大学の社会調査やメディア関連の科目における表現・協働・発信力を培う実践的授業として応用する取り組みを行ってきた (西川 2016c)。米国のコミュニティラジオ局と日本の大学をインターネットで接続して教室からラジオ番組を制作・配信をするという「メディア実践系」授業については, 西川 (2018), 松川・辻野・西川 (2018, pp.111-120) に詳述した。ここでは, 現代のメディアテクノロジーを利用した国際的な地域連携の一例として「メディア文化論」の授業での取り組みを紹介している。
- 6) 日本の ZINE については, ばるぼら, 野中モモ編著 (2017) を参照。
- 7) Harukana Show Old Site: Blog 「ゆったり Zine な土曜日 ~Midwest Zine Fest @ IMC, May1, 2011」, Harukana Show Albums 「Midwest Zine Fest, April 30, 2011」, Harukana Show Blog: 「Chrisさんのインタビュー (April 22, 2011) Zine: メインストリームに抗するメディア, Nov.20, 2016」を参照。
- 8) 2018年3月に UCIMC の Zine Library を訪問した時には, BOMBAY ZINE FEST2018 のポスターが貼られていた。このライブラリーの担当者 La Barre (注16参照) が, 2018年3月9日~11日にインド, Mumbai で開催された Zine Fest に参加し, そこで入手した Zine がライブラリーに展示されていた。Zine は制作者だけでなく Zine カルチャーをサポートしている人々の間の交流も盛んである。Harukana Show Podcast: 「No.372, May 4, 2018, ガーデニングの季節, 支え響きあう『ZINE』Culture」を参照。
- 9) 英米での地域活動とメディアについての調査をもとに, 様々な関係者に草稿を読んでもらいながら GMZ にまとめ, Zine 制作と頒布というプロセスを通して調査で出会う人々と読者と情報を共有してきた。また GMZ を持参して Zine をめぐる活動に参加し新たな関係を作ってきた (西川 2017)。
- 10) 本論文の参考文献・資料の Harukana Show Blog, Podcast を参照。英国の London, 米国の Urbana-Champaign, Chicago, St. Louis, New York, 日本の Tokyo, Kyoto などの, 公共図書館, 大学図書館, 書店, プリントスタジオ, レコードショップ, NPO の関連団体, イベントなどを取材している。
- 11) 西川 (2017) では, 「手作りの感触を残すモノとしての Zine が, 作り手と読み手のパーソナルな対話を生み出し, 他者をつなぐコミュニケーション・ツールとなりうる」 (p.52) と指摘し, 「顔が見える他者をつなぐ」 Zine の特質を次のようにまとめた。「Zine 作りは, その人の自発的アクションであり, Zine には作り手の, その時々への思いが, 文章やイラストやレイアウトや冊子の綴じ方に表現され, ピープマイヤーがいう作り手の『身体性』を残す。しかし, Zine は閉じた世界の表現ではなく, 作者の身体からいったん切り離されたモノとして存在し, 他者に引き渡される。『手頃な大きさ』のモノとして人の手から手へと渡される感覚は, インターネットのなかでのやりとりとは異なる。Zine には, 作者の思い入れとモノとしての感触がある。Zine フェアや Zine 作りのワークショップでは, 参加者が Zine を並べたそれぞれのブースや作業机を囲んで Zine を手に取った感想を伝え合う距離の近さを楽しんでいる」 (p.62)。
- 12) The zine libraries interest group website を参照。
- 13) Harukana Show Blog: 「St. Louis から Zine レポート (1) クリエイティブに模索する公共図書館, Zine Collection & Recording Room, Oct.22, 2018」を参照。Zine はまた, 現代の大衆文化を知る重要な一次資料としても収集されている。Zines at The New York Public Library website を参照。
- 14) イギリスや日本でも, 美術系の大学の授業やプロジェクトでは Zine が制作されている。Harukana Show

- Blog: 「London から Zine レポート(2) London College of Communication の Zine Collection, Sept. 16, 2015」, LCC Collections and Archives website, 金沢美術工芸大学 ZINE PROJECT 2018 website を参照。
- 15) フェミニスト・ペダゴジーについては、虎岩 (2016) を参照。
- 16) IS (School of Information Sciences) 502Fall 2018: Libraries, Information, and Society (Kathryn La Barre 担当)。La Barre は、イリノイ大学情報科学部の准教授であり、UCIMC の Zine Library も運営している。地域の Zine を収集、整理し、UCIMC の本棚に誰でもが手に取れる形に展示している。また地域の公共図書館でも Zine Workshop を開催している。こうした地域における活動には、La Barre のもとで学ぶ大学院生や卒業生も参加している。イリノイ大学は州立大学であり、各学部、センターが一般住民に開かれたイベントを多く開催しているだけでなく、教職員が、教育の一環として、あるいは一個人として地域の活動に入り込んでいる。筆者が La Barre と知り合ったのも、UCIMC の活動を通してである。UCIMC Zine Library については、Harukana Show Blog: 「表現しながら人とつながるツール @Zine Library, April 14, 2015」 「Illinois から Zine レポート(3) Champaign-Urbana でゆるやかな Zine つながり, Aug. 21 & 23, 2016」 「Illinois から Zine レポート(4) UCIMC の Zine Library が身近に, August 2017」 を参照。
- 17) Harukana Show Blog: 「Zine in the Classroom (2) 図書館学の Zine Workshop, Nov. 28, 2018」 を参照。
- 18) UP (Department of Urban and Regional Planning) 260 Fall 2018: Social Inequalities, Planning, and Insurgent Formations (Efadul Huq 担当)。Huq は同大学院博士課程在籍。
- 19) Harukana Show Blog: 「Zine in the Classroom (1) 『Zine を使った授業の作り方』, Sept. & Oct., 2018」 を参照。
- 20) 「ZINE 大会」と呼ぶようになって、学生たちの授業への「とっつき方」が変わった。「先生、賞品でるんですか？頑張ります！」と学生に宣言されて、戸惑ったこともあった。彼のような他学科からの受講生にとっては、この授業の課題をこなすことは容易ではない。それでも、「大会」という言葉を聞いて参加が楽しみになったようだ。その年の「ZINE 大会」では、彼の作品は、多くの読者の推薦を得た。こうした、「イベント」作りにおける「遊び」の要素の重要性を、筆者は、草の根の活動とメディアについてのフィールドワークやメディア実践を通して学んできた。Harukana Show のスタッフでありジンスタでもある立石尚史氏に「フィールドワーク研究」のゲストスピーカーとして参加してもらったことも、この授業作りに影響を及ぼしている。Harukana Show Podcast: 「No. 166, May 30, 2014, Learning Commons で『会読』, 知的好奇心をキックする with Okabe-san」, 「No. 169, June 20, 2014, Tateishi 風パンクロックな『イベント論』」を参照。
- 21) 西川 (2010) の事例編では、西川の日本、バンクラ
- デシュ、イギリスでの、異なるタイプのフィールドワークを紹介している。
- 22) “Teaching with Zines” では、Zine は、とてもパーソナルなものであり、だからこそ生徒たちのつながりを作ることもあるが、気をつけないと生徒たちを傷つけてしまうこともある、と述べている (A bunch of zine librarians 2018, p. 1)
- 23) 詳細は、Harukana Show Blog: 「Zine in the Classroom (3) 都市問題の授業で Zine Fest, 主張する Zines, Dec. 11, 2018」に会場や Zine 作品の写真を添えて掲載している。
- 24) Bookartbookshop を運営する Tanya Peixoto 氏とは、Grassroots Media Project の活動を通して知り合い、Harukana Show の番組でも何度か取材をさせてもらった。Harukana Show Podcast: 「No. 342, Oct. 6, 2017, Bookartbookshop, アートと本と人と場所をつなぐ with Tanya」, Blog: 「London から Zine レポート(4) Bookartbookshop, Sept. 18, 2015」 「London から Zine レポート(5) Housmans Bookshop & Bookartbookshop, Sept. 9, 2016」 「London から Zine レポート(9) Bookartbookshop に触発されて、次の夢は…Sept. 8 & 14, 2017」 を参照。2019年1月24日の展示会については、「London から Zine レポート(11) Bookartbookshop で SKU Fieldwork Project の Zine 作品展示! Jan. 17 & 24, 2019」に詳しく述べている。

参考文献・資料

参考文献

- A bunch of zine librarians (Kathleen Aragon, Deanie Adams, Jolie Braun, Emma Fernhout, Juli Huddleston, Kelly McElroy, Sarah G. Wenzel, and Kelly Wooten)
- ・ 2018, “Teaching with Zines”, a bunch of zine librarians, Durham, NC.
- ばるばる・野中モモ編著
- ・ 2017, 『日本の ZINE について知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960～2010年代』, 誠文堂新光社
- Bartel, Julie
- ・ 2004, ‘From A to Zine: Building a Winning Zine Collection in Your Library’, American Library Association
- Creasap, Kimberly
- ・ 2014, “Zine-Making as Feminist Pedagogy” in ‘Feminist Teacher’, vol. 24, no. 3, pp. 155-168
- Dumcombe, Stephen
- ・ 2008 [1997], ‘Note from Underground: Zines and the Politics of Alternative Culture’, Microcosm Publishing
- Garza, Thomas ed.
- ・ 2013, ‘Grassroots Media Zine’, No. 1, Harukana Show org.
 - ・ 2014, ‘Grassroots Media Zine’, No. 2, Harukana Show org.
 - ・ 2016, ‘Grassroots Media Zine’, No. 3, Harukana Show org.
- Hoffmann, Frances L., and Jayne E. Stake.
- ・ 1998, “Feminist Pedagogy in Theory and Practice: An Empirical Investigation.” *NWSA Journal* 10, pp. 79-97
- 松川恭子・辻野理花・西川麦子

- ・2018, 『『メディア実践系』授業の作り方(実践編): 他者から学び, 伝える方法』『甲南大学紀要文学編』 No.168, pp.105-132

西川麦子

- ・2010, 『フィールドワーク探求術: 気づきのプロセス, 伝えるチカラ』ミネルヴァ書房
- ・2012, 「コミュニティラジオをグローバルに開く: アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP の日本語番組の試み」『甲南大学紀要文学編』 No.162, pp.51-68
- ・2013a, 「多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから」『世界思想』40号, 2013年春, pp.18-21
- ・2013b, 「運動としてのコミュニティ・メディア: アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP とグローバルなネットワーク」『甲南大学紀要文学編』 No.163, pp.133-152
- ・2013c, “A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United State”, Garza, Thomas ed. ‘Grassroots Media Zine’, No.1, pp.1-18, Harukana Show org.
- ・2014a, 「地域の多様性をつなぐメディア実践: アメリカ, イリノイ州, アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち」『甲南大学紀要文学編』 No.164, pp.113-132
- ・2014b, “The Ghost of George Clark: From An Interview With Stuart Hall”, Garza, Thomas ed., ‘Grassroots Media Zine’, No.2, pp.3-44, Harukana Show org.
- ・2014c, 「コミュニケーションツールとしてのラジオ」『建築雑誌』 Vol.129, No.1665, pp.30-31
- ・2015, 「1960年代, ノットティングヒルの『新しい』コミュニティ活動に関する研究序説: スチュアート・ホールからの問い」『甲南大学紀要文学編』 No.165, pp.141-157
- ・2016a, 「1960年代, ノットティングヒルにおけるロンドン・フリースクールのメディア戦略: John ‘Hoppy’ Hopkins の『ハプニング』の作り方」『甲南大学紀要文学編』 No.166, pp.87-104
- ・2016b, “John ‘Hoppy’ Hopkins: interviews from 2009-2014”, Garza, Thomas ed., ‘Grassroots Media Zine’, No.3, pp.1-70, Harukana Show org.
- ・2016c, 「アクションリサーチ法」工藤保則, 寺岡伸悟, 宮垣元編『質的調査の方法—都市・文化・メディアの感じ方』第2版, 法律文化社, pp.144-155
- ・2017, 「現代のコミュニケーション・ツールとしてのZINE: 顔が見える他者を引き寄せるメディア」『甲南大学紀要文学編』 No.167, pp.51-66
- ・2018, 『『メディア実践系』授業の作り方(総論): 甲南大学文学部社会学科の取り組み』『甲南大学紀要文学編』 No.168, pp.95-104

Piepmeyer, Alison

- ・2009, ‘Girl Zines: Making Media, Doing Feminism’, New York University
- ピープマイヤー, アリソン著, 野中モモ訳
- ・2011, 「ガール・ジン: 『フェミニズムする』少女たちの参加型メディア」太田出版

虎岩朋加

- ・2016, 「ポスト構造主義の後のフェミニスト・ペダゴジーはどのようなものでありうるか(報告論文, シンポジウム2 フェミニズムとジェンダー論は教育学に何をもたらしたのか?—思想的な中間総括—)」『近代教育フォーラム』25巻, 2016, pp.139-147

上谷香陽

- ・2012 「フェミニズムのオルタナティブ・メディアとしてのガール・ジン (girl zines): アメリカ合衆国における少女たちの文化創出活動の系譜」『文教大学国際学部紀要』第23巻1号, pp.1-14

Harukana Show Blog : <http://harukanashow.org/archives/category/mugi-chan-blog>

archives/category/mugi-chan-blog

西川麦子

- ・「表現しながら人とつながるツール @Zine Library, April 14, 2015」
- ・「London から Zine レポート(1) Stuart Hall Library, Invia & Housmans Bookshop, Sept. 11, 2015」
- ・「London から Zine レポート(2) London College of Communication の Zine Collection, Sept. 16, 2015」
- ・「London から Zine レポート(3) ROUGH TRADE & Fan-zine, “Vague”, Sept. 17, 2015」
- ・「London から Zine レポート(4) Bookartbookshop, Sept. 18, 2015」
- ・「Illinois から Zine レポート(1) Quimby’s Bookstore: Zine が生き生きと並ぶ, Chicago, Aug. 7, 2016」
- ・「Illinois から Zine レポート(2) CHIPRC, Zine Culture をはぐくむ草の根の活動, Chicago, Aug. 7, 2016」
- ・「Illinois から Zine レポート(3) Champaign-Urbana でゆるやかなジンつながり, Aug. 21 & 23, 2016」
- ・「London から Zine レポート(5) Housmans Bookshop & Bookartbookshop, Sept. 9, 2016」
- ・「London から Zine レポート(6) Artist Self-Publishers’ Fair, Sept. 2016」
- ・「London から Zine レポート(7) GMZ#3 がつなぐ縁, Sept. 11-19, 2016」
- ・「London から Zine レポート(8) London Print Studio & London Centre of Book Arts, Sept., 2016」
- ・「Chris さんのインタビュー (April 22, 2011) Zine: メインストリームに抗するメディア, Nov. 20, 2016」
- ・「Illinois から Zine レポート(4) UCIMC の Zine Library が身近に, August 2017」
- ・「London から Zine レポート(9) Bookartbookshop に触発され, 次の夢は… Sept. 8 & 14, 2017」
- ・「London から Zine レポート(10) Housmans Bookshop へ GMZ を買いにゆく, Sept. 13, 2017」
- ・「St. Louis から Zine レポート(1) クリエイティブに模索する公共図書館, Zine Collection & Recording Room, Oct. 22, 2018」
- ・「St. Louis から Zine レポート(2) 運動としての書店, LEFT BANK BOOKS, William Burroughs の縁, Oct. 22, 2018」
- ・「U-C の The Idea Store と『工芸品』としての Zine,

- Nov. 24, 2018]
- ・「NY から Zine Report (1) 『いいなあ』と『びみょう』な感じ @The Center for Book Arts, NY Public Library, Dec. 3, 2018]
- ・「NY から Zine Report (2) NY と London の草の根のつながり @The Velvet Underground Experience, Printed Matter, Inc., Dec. 4, 2018]
- ・「Zine in the Classroom (1) 『Zine を使った授業の作り方』, Sept. & Oct., 2018]
- ・「Zine in the Classroom (2) 図書館学の Zine Workshop, Nov. 28, 2018]
- ・「Zine in the Classroom (3) 都市問題の授業で Zine Fest, 主張する Zines, Dec. 11, 2018]
- ・「London から Zine レポート(1) Bookartbookshop で SKU Fieldwork Project の Zine 作品展示! Jan. 17 & 24, 2019]
- ・「London から Zine レポート(2) Bishopsgate Library の Punk Fanzine に圧倒される, Jan. 21, 2019]

Harukana Show Old Site : http://harukanashow.org/archive/HARUKANA_SHOW/English.html

- ・Podcast 「No. 4-1, April 22, 2011 アメリカの Zine とは?」
- ・Blog 「ゆったり Zine な土曜日~Midwest Zine Fest@IMC, May 1, 2011」
- ・Albums 「Midwest Zine Fest, April 20, 2011」

Harukana Show Podcast : <http://harukanashow.org/archives/category/harukana-show-podcast>

- ・「No. 166, May 30, 2014, Learning Commons で『会読』, 知的好奇心をキックする with Okabe-san」
- ・「No. 169, June 20, 2014, Tateishi 風パンクロックな『イベント論』」
- ・「No. 209, March 27, 2015, レコードショップに Zine があった頃 with Tom-san」
- ・「No. 222, June 26, 2015, En-Zine トーク(1) Tateishi さんの ZINE な生き方」
- ・「No. 223, July 3, 2015, En-Zine トーク(2) 途中を形にして共有する with Mugiko」
- ・「No. 224, July 10, 2015, En-Zine トーク(3) もう一つの生き方, やり方 with Sabu-san」
- ・「No. 225, July 17, 2015, En-Zine トーク(4) スコットランド, グラスゴーでファンジンの世界に出会う with Ogasawara-san」
- ・「No. 270, May 20, 2016, GMZ#3 物語(1) 『印刷コンシェルジュ』に会いに東京へ, インテュニック訪問」
- ・「No. 271, May 27, 2016, 『アメリカーナ』, GMZ#3 物語(2) Zine の歩き方」
- ・「No. 287, Sept. 16, 2016, Zine collection をライブラリーする with Kathryn」
- ・「No. 296, Nov. 18, 2016, HS リバイバル (No. 4), 今こそ Zine, with Chris」
- ・「No. 337, Sept. 1, 2017, 夏の UC レポート, 「Zines は時代とともに」 with Em-san」

- ・「No. 342, Oct. 6, 2017, bookartbookshop, アートと本と人と場所をつなぐ with Tanya」
- ・「No. 368, April 6, 2018, HARUKANA SHOW 8年め! & ZINE MAKING AS SOCIAL ACTION」
- ・「No. 372, May 4, 2018, ガーデニングの季節, 支え響きあう『ZINE』Culture」

Harukana Show Zine & Paper : <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>

- ・「Grassroots Media Zine#1 (in English): A Media Space for Cultural Exchange」
- ・「Grassroots Media Zine 創刊号」
- ・「Grassroots Media Zine#2 (in English): an Interview with the late Prof. Stuart Hall」

以上, Harukana Show web-site 制作: 西川麦子 (最終アクセス2019年2月13日)

URL

- ・Barnard Zine Library: <https://zines.barnard.edu>
- ・Bishopsgate Institute: <https://www.bishopsgate.org.uk>
- ・Bookartbookshop: <http://www.bookartbookshop.com>
- ・Chicago Publishers Resource Center (CHIPRC): <http://chiprc.org>
- ・DIY CULTURES: <http://diycultures.tumblr.com>
- ・Grassroots Media Zine: <http://grassrootsmediazine.org/>
- ・Harukana Show: <http://harukanashow.org/>
- ・Housmans: <http://www.housmans.com>
- ・Institute of Contemporary Arts: <https://www.ica.org.uk>
- ・Inuuniq: <https://inuuniq.co.jp>
- ・一般社団法人社会調査協会: <http://jasr.or.jp>
- ・LCC Collections and Archives <http://www.arts.ac.uk/study-at-ual/library-services/collections-and-archives/london-college-of-communication/>
- ・London Centre for Book Arts: <http://www.londonbookarts.org>
- ・London Print Studio: <http://www.londonprintstudio.org.uk>
- ・金沢美術工芸大学 ZINE PROJECT2018: <http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/event/5334/>
- ・Quimby's Bookstore: <http://www.quimbys.com>
- ・Stuart Hall Library: <http://www.iniva.org/library>
- ・The zine libraries interest group: <http://zinelibraries.info/about/>
- ・Urbana Champaign Independent Media Center: <http://www.ucimc.org>
- ・UCIMC Zine Library: http://www.ucimc.org/zine_library2
- ・WRFU-LP104.5FM: <http://www.wrfu.net>
- ・Zines at The New York Public Library: <https://www.nypl.org/about/divisions/general-research-division/periodicals-room/zines>

*最終アクセス2019年1月29日